

ミヤコワスレ

津木林洋

坪庭に見慣れない花が咲いている。彼は下駄を履いて庭に下りてみた。薄紫の細い花弁が黄色いおしべを取り巻いており、フランスでよく見掛けるマルグリットに似ている。

玄関の引き戸の開く音がして、制服姿のセツコが廊下をやつて來た。

「こ。<sup>。。。</sup>んにちは」と彼女が言う。

彼は挨拶を返し、「この花は何ですか」と手で示した。

「都忘れです」

「ミヤコワスレ?」

セツコは困った顔をした。そして鞄から辞書を取り出すと、たどたどしいフランス語で説明してくれた。

帝が罰を受けて流刑地に流された時、この花を見て、しばし都への思いを忘れることができたという。

彼は一年前、京都の芸術大学で絵画を教えるために招かれた。画家になつて三十年、教えた経験はなかつたが、愛人がパリの自宅に押し掛けて来て、彼と妻の三人で同居が始まつてしまい、そこから逃げるようにして日本からの招聘を受けたのだ。もうすぐ招聘期間が終了する。

セツコとカフェオレを飲んだ後、町屋の一室を改造したアトリエに入つた。

彼女は着衣をすべて脱ぐと、椅子に腰を降ろし、昨日と同じように右膝を立てるポーズを取つた。薄い胸に恥毛のない陰部。十五歳の日本女性は彼のイメージする少女そのものだ。

その時一つのアイデアが浮かんだ。彼は筆を置くと坪庭に行つて、ミヤコワスレを一輪摘み取つてきた。それを彼女に持たせる。白い体に薄紫の花が咲いた。

ひよつとしたら滞在が延びるかもしれない、ふつとそんな予感がした。